

てさぐれ！ ケムリク
サ(口調編)

シベリア！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ケムリクサの単発ギャグものです。

拙い出来かもしれませんが、笑ってみて頂けると幸いです。

※pixivにも同じ作品を投稿しています。

目次

てさぐれ！ ケムリクサ（口調編）

1

てきぐれ！ ケムリクサ（口調編）

昔々、ある所に、大変仲の良い6人の姉妹がいた。

6人は水を求めて見知らぬ土地を歩き回り、たまあゝに出てくる赤色の霧から逃げ回ったり、たまあゝに襲ってくる赤色のムシを力を合わせて撃退したり、色々大変ながらも楽しく生きていた。

しかし、そんな6人にも悩みがあり……

「えつと……りく……じゃない、りなりやん？」

「私はりつだよ、りようちゃん」

「ありやく、また間違っちゃったか」

「声で大体分かるでしょ」

「その辺、私には分からないんだよなあ、匂いも……あんまり変わんないし」

6姉妹の長女がすんすと鼻を鳴らす。

6姉妹は全員同じ顔、同じ匂い、同じ髪型、同じ口調だったので、何度も何度も互いの名前を間違えてしまう。

「りっちゃんはさ、どうやって声、聞き分けてるの?」

「どうやって……聞こえ方が違うとしか……」

「ううくん、やっぱり分かんないなあ……」

「まあ、私も匂い、分からないからおあいこだよ」

「でもこの先困らない? りっちゃんだと思っいたらりなちゃんだったり、

りんちゃんだと思ったらりよくちやんだったり、今まで何度もあつたでしょ?」

「そくだねえ、この前、名前を間違えられて、りんが泣きそうになってたし」

「何とかなんないかなあ」

「そくだねえ、何か策は……」

2人がうくと考え込み……

「そーだっ! 声の違いが分からないなら、喋り方を変えれば良いんだ!」

基本大雑把な三女がぼんつと手を叩いた。

……

……

……

10分後、部室。

何の部室かはあえて明言を避けよう。

「はい、そんな訳で今日はみんなの口調を考えてみよう」

「相変わらず唐突だなオメーら」

「こういうの、りつりよう体制って言うんだって」

「りよくは色んな事知ってるね」

「いや、私も……そこまで詳しく知ってる訳じゃないけど……」

「この部屋、色んな形の物があるね。じゅるり……」

「あ、ちよつと！ 私が調べるまで食べないですよ！ 新しい文字が見つかるかもでしょ」

「食べても後で出せるし、大丈夫っしょ」

「そういう問題じゃないの！ 全く……それで、どうやって口調決めるの？」

「えつと……りつちゃん、どうしようか？」

「りょうちゃんは、何か良い考え、無いの？」

「全く無い」

「胸張って断言すんな！」

「とにかくみんなでてさぐってこーぜ！」

「……」

「……全員無言かよっ!? 何でも良いから何か言えよ！」

「いや、これ下手な事言ったら自分で使う羽目になりそうじゃん」

「そう言えば、その辺決めてなかったな。 どうすっぺ?」

「今の……りよくが言ってた、『じゃん』っての、良い感じじゃない」

「びやあっ!? 拾われたあっ!?」

「あ、ごめん……余計な事、だったのかな?」

「うんうん、りんのファインプレーだよ。 早速一個口調が決まったね」

「りよくちゃんは今後喋る度に『じゃん』ってつけると……」

「ちよつと待ったあっ!! これからずつと語尾にじゃんってつけないといけないの!?

何か凄く馬鹿っぽいじゃん!!」

「りよくちゃんは時々『じゃん』ってつけてたから、大丈夫だよ」

「ほいそんじや次の案、誰かあるか?」

「「「「……………」」」」」

「……やっぱ無言かよっ!? 何か言えよ!」

「とりあえずルール変えよう。」

提案した本人が口調変えさせられるんじや迂闊に喋れないよ」

「そうかも……じやあこうしよう」

基本大雑把な三女が部屋の奥から古びた箱を引っ張り出す。

『カード川柳用』と書かれたその箱であるが、6姉妹全員が漢字を読めないため、誰もそ

の箱の中身が何のための物かが分からない。

「確かこの……えつと……」

「ペン」

「そうそう、ペンっていうので文字が書けるんだったよね？」

「これにみんなが考えた口調を書いていって、

最後に一枚ずつ配って決めるってのはどうかな？」

「6分の1で自分に当たるのか……でも、さつきよりは話が出しやすいかも」

「じゃあさつきりよくちゃんが考えた『じゃん』って書いて……」

「考えた訳じゃないって！」

「じゃあルールも決まったところで、誰か何かないか？」

「はい！」

「おっし、じゃありなの考えた……新しい口調！」

「にやあ！」

「ド直球!?!」

「あるけど！　そういう口調のいるけど！」

「し、四六時中語尾ににやあって……」

「やべえ腹振れる！　腹痛えつ!!」

「ちよつとりなちゃん、試しにやってみて」

「今日も一杯食べて、お腹いっぱいだにやあ」

「あははははははっ!!」

「赤ムシが出たにやあ! りなが齧ってやるにやあ!」

「腹痛えっ! やべ、死ぬうっ!!」

「待つてりな! 6分の1で自分に刺さるんだよ! 良いの?」

5女は無言でサムズアップした。

「採用!」

「異議無し!」

「はいはい、2つ目の口調は『にやあ』と……」

なんだろう、この会議終わったら私ら凄いいけない集団になつてる気がする」

「りよくちゃん、そこは笑える集団って言うべきだと思うよ」

「長女! こういう時は長女が真っ先に留めるべきだし!」

何で真っ先に親指立てて採用何て言うんだよ!」

「いやあ、長女って言ったって最初に起きただけだからねえ」

「そうだけどさあ」

「誰もお姉ちゃんって呼んでくれないし……」

「オレは結構呼ばれてるぞ」

「そうだねえ、りく姉は……何と云うか、お姉ちゃん指数が高い感じだよねえ」
「時々どん臭いけど」

「うつせえな、お前らが痛みに鈍感なだけだろ」

「私達にとつて、りくは大事な姉さんだよ」

「お、おう……わ、分かってりや良いんだけどな……」

「りんちゃん、私は？」

「りようも大事な姉妹だよ」

「やっぱり姉だとは思われてない!? 私長女だよね!?!」

「りようちゃんは……何と云うか、りようちゃんつて感じだよね」

「鉄パイプ持つて突撃するイメージしか無いな」

「お姉ちゃんと言ふより……蛮族？」

「りくちゃん、皆が虐めるよ」

「はいはい、頼りにしてるよお姉ちゃん」

「おら、そろそろ別の案出せ、誰かいねえのか？」

「じゃあ……はい！」

「おっし、それじゃあ……りんが考える、新しい口調」

「じゅげむじゅげむごこうのすりきれかいじやりすいぎよのすいぎようまつうんらいまつふうらいまつくうねるところにすむところやぶらこうじのぶらこうじパイポパイポパイポのシューリンガンシューリンガンのグリーンダイグリーンダイのポンポコピーのポンポコナーのちようきゆうめいのちようすけ……とかどうかな?」

「長いっ!」

「長すぎ!」

「本当に残念な姉だし……」

「りんちゃん、例えば赤霧が出たり、

赤ムシと戦ってる最中にその口調を使うとしてさ……」

「赤ムシだぞー、食べちゃうぞー!」

「食べないでください!」

「ああっ! じゅげむじゅげむごこうのすりきれかいじやりすいぎよのすいぎようまつうんらいまつふうらいまつくうねるところにすむところやぶらこうじのぶらこうじパイポパイポパイポのシューリンガンシューリンガンのグリーンダイグリーンダイのポンポコピーのポンポコナーのちようきゆうめいのちようすけが危ない!」

「ぶはっ!」

「ちよ、反則……」

「落ち込むなって、手探るってのは没ネタも楽しんでこそだろ」

次女が四女の肩をぼんぼんと叩いて励ました。

「りよう、アレが姉指数だよ」

「そつかあ、私に足りてないのはああいうのか……」

「んじゃ次のネタ誰かあるか？」

「はい」

「おつ、りようか」

「これで姉指数を取り戻すよ」

「んじゃあ長女の威厳を賭けて……りようの、新しい口調」

「だわさ!」

「だ……だわさ……?」

「いや、決して駄目って訳じゃないけど……」

「残念なネタじゃない」

「にやあの破壊力が凄すぎたな」

「でもまあ、他と区別するだけなら悪く無い感じ?」

「じゃあ、採用すつぺ」

「そうだね、3つ目は『だわさ』と……まあ、『にやあ』よりマシかなあ……」

「待つて！ 待つて！ 待つて！ このネタ続きがあるから！ 捧腹絶倒だから！」

「え、聞きたいか？」

「……いや、別に」

「あの柱、美味しそうだな」

「聞いてよ！ 絶対面白いから！ これが面白く無かったら長女返上で良いから！」

「分かった分かった、仕方ねえな……はい、りょうちゃんの、新しい口調」

「だわな！」

「大して変わってない！」

「だからりょうちゃんはいつまで経ってもりょうちゃんなんだよ」

「もうりつりよう体制止めて、りく姉がリーダーで良いんじゃないかな」

「え、やだよ面倒臭え」

「りなは食べれば何でも良いかな」

「え、あの……りようは頑張ってると思う」

「もう私の味方はりんちゃんだけだよ……」

「どうする？ 4つ目『だわさ』にするか？」

「『だわな』と『だわさ』じゃ被ってるじゃん」

「んじゃ2つ併記でいくか」

「了解、『だわさ』または『だわな』と……」

「あと3つか……だんだん考えるのが面倒になってきたな」

「りくねえねは他のみんなと喋りかた違うから、

無理して口調変える必要無いんじゃないかな」

「あ、んじゃああと2つで良いのか。それならイケそうだな」

「それなら、6人中5人が特徴的な口調してれば、

最後の1人は特徴的じゃなくても判別つくんじゃない」

「りなちゃん賢い!」

「ふふ〜ん! りなちゃんは賢いんだ」

「じゃあ4つ目は『りく姉つぼく』、5つ目は『なにもなし』と……」

「あれ、『なにもなし』をりく姉が引いたら、

りく姉つぼい口調の娘が2人になるんじゃない?」

「増えるりく姉さん……悪くない」

「りんちゃん!? りんちゃんつ!?」

「りんねえね、りくちゃんは増えないよ」

「そうだね、ごめん」

「そろそろこの会議も飽きて来たし……んじゃ、オレから」

「りくちゃん考えた、新しい口調は？」

「クポ！」

「く、くぼ……」

「何か分からないけど、危険な香りだねえ」

「りく姉、試しにやってみて」

「押してからさらに強めに押すクポ。ドクつと来るクポ。」

「したら丸いが出るから選ぶクポ、したらすげえ光るクポ」

「ちよ!？」

「は、反則！ それ反則！」

「似合わないし絶対！」

「いや、誰がやっても合わないよ絶対」

「りようちゃん、ちよつとやってみて」

「あの赤いの、また出てきてくれないクポ？ もっと戦いたいクポ」

「あはははははははっ!!」

「右から襲ってきたら……こうクポ！ 下から出てきたら、こうやって、こうだクポ！」

「りようちゃんが可愛くなってる!？」

「糸目とクポの相性が……ぶふっ！ 駄目、もう限界いつ!!」

「腹が振れて戦い所じゃねえよ! 却下却下!」

「はいっ!!」

「りつの、新しい口調」

「びよん!」

「にやあと被つてるだろ!?!」

「りつはウサギだびよくん! さみしいと死んじやうびよくん!」

「似合わねえーっ!!」

「は、破壊力が半端じゃない……」

「りん……みんなが虐めるびよん……」

「大丈夫、どんな口調でもりつ姉さんはりつ姉さんだから」

「でも、意外とイケんじやね、インパクトあつし」

「待った! 地雷枠をこれ以上増やされたら溜まったもんじやないよ!」

「えええ。じやありよくが何か考えろよ」

「本当は『じゃん』もやめてほしいんだけどな……」

「はいそれじゃあ、りよくの新しい口調」

「えつと……ううんと……『なんだな』とか?」

「『なんだな』か……」

「りよくちやん、ちよつとやってみてよ」

「残念な姉達なんだな、ロクなアイデアが出ないんだな」

「うゝん、あんまりインパクトが無いな……」

「そうかな、私は良いと思うけど」

「りんは優しいねえ」

「だかなあ、駄目なもんはハッキリ駄目って言うのも姉としての慈悲だ」

「りくちやんはこういう所で姉指数を稼いでいるんだナ」

「私に足りないのはそういうトコかなあ……って、

今りなちやん、語尾になんだなってつけなかった？」

「……あ」

「りよくちやん駄目だよ、既存の口調を丸パクリしちやゝ」

「急にネタ振りされたんだから仕方ないって!!」

「もう面倒臭いから6番目『なんだな』で良いんじゃないか」

「はい！ はいはーいっ!!」

「はい！」

「りなの、新しい口調」

「君は眼鏡かけるべきだ！」

「眼鏡!? 何それ!？」

「眼鏡……目の見え方を変える道具……だと思っ、たぶん」

「へえ。じゃああたしにも眼鏡をかけたらりよくちやんみたいに見えるのかなあ？」

「眼鏡が見つかったら試してみるのも良いかも」

「でも、会う度に眼鏡かけろって言ってくる姉とか、正直想像したくないんだけど」

「うーん、悪かねえんだが、長いし……却下で良いか」

「はい!」

「りつの、新しい口調」

「やっと思つけたぞ、故郷を滅ぼした男よ!」

「だから長いっての!」

「はい!」

「りんの新しい口調」

「ドヤアツ!」

「日常会話に混ぜて良い台詞じゃないだろ!」

「短くしてみたんだけど……駄目かな?」

「会話の度にドヤ顔になるりん……新しいかも」

「はい!」

「三度目の正直なるか、りょうの新しい口調」

「ただしイケメンに限る！」

「またイケメンネタか！」

「鉄パイプに細いイケメンはいないって!!」

「急にイケメンが出てきて助けてくれるかもしれないでしょ！」

「現実見ろ長女！」

「だからアンタはいつまでたっても残念な姉なんだよ！」

「りんちゃん……」

「えっと……急にイケメンが出てきたら……出てきたら……いい、良いね」

「りん、駄目と思った時は駄目だって言っても良いんだよ」

そんなこんなで夜はふけ……

……

……

……

「全員カードは引いたな？」

「うん……泣いても笑っても一発勝負……」

「りつ姉、後で交換使用は無しだよ」

『何も無し』来い、『何も無し』来い、『何も無し』来い……」

「まあ、私はどんな口調でも、戦えれば満足だからね」

「そういう意味では、りなも色々食べられれば満足だよ」

「んじゃあ1、2の、3で表にすつぞ……」

「1」

「2の……」

「[[[[[[……3つ!!]]]]]]」

6 姉妹が同時にカードをひっくり返し……

「びやあああああーっ!!」

末っ子の断末魔の叫び声が部屋に木霊した。

「んだよ、オレが『りくつぽい口調』かよ、面白みがねえな」

「増えるりく姉さんはお預けか……」

「りく姉は唯一無二の存在って事ニヤー」

「りつ姉さんはどうだった？」

「私は語尾に『にやあ』をつける事になったニヤー。りんはどう？」

「私は何も無しだった」

「一番の安全牌はりんに行ったか……じゃん。」

私はこれからずつとこんな喋り方しなきゃいけないの……じゃん」

「とつてつけたような言い方だナ。ちゃんとやるんだナ」

「適応早っ!?! ……じゃん」

「まあまあ、慣れるまではしばらくかかるだろうし、しかたないよ……だわな」

「そう言うりよくちゃんもぎこちないナ」

「何にせよ、これで判別がつく……つくか?」

「多少はマシになるかも……じゃん」

「まあ、色々やってみるしかないんじゃない……だわな」

「口調だけじゃなくて、他にも何あると助かるかもだニヤー」

「そう言えば、最初の人が残したメモに気になる事が書いてあつてね……じゃん」

「へえ、興味あるなあ。教えてよ……だわさ」

「コスプレっていうんだけど……」